
黒電話

松嶋ネコヂロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒電話

【Nコード】

N5302Q

【作者名】

松嶋ネコヂロウ

【あらすじ】

君は、意気地なしだね——黒電話がそう言った。莉奈シリーズ一作目。

——君は、意気地無しだね。

黒電話がそう言った。

莉奈は一度、黒電話のことを無視した。

それから膝を抱え、電話台に背を預ける。ぎし、と木の軋む音がした。ひどく古い電話台だ。こうして少し体重を加えるだけで音を立てるほどに頼りないし、色合いだって、木目が判らないほど黒ずんでいる。引き出しの面に張られた赤茶の革張りは破れ、革の先がくると丸まり、中の黄色いスポンジが露出していた。

莉奈は幼稚園の頃、よく物を破ったり壊したりする癖があって、時折それで祖母に叱られた。この電話台の革張りだってそのうちの一つだった。莉奈が五歳のとき、革の弾力に興味を持っては爪をカリカリと立てて遊び、そのうち破れて、今度は革を剥ぐ感覚を楽しんだ。そうすると祖母が凄い剣幕でこちらへやってきて、「物は大切にせんといけん」と莉奈を叱りつけた。

物を大切にする感覚はよく分からなかったが、そのとき、初めて声が聞こえた気がした。電話台はあまりの痛みに啜り泣き、台の上に乗っていた黒電話は莉奈に対して怒りを訴えたのだ。

三重の叱責に、莉奈はたまらず大泣きした。泣き出す莉奈を、祖母はただじっと見守るだけだった。やがて泣き疲れ、うとうとし出したところで、祖母は優しく莉奈を抱き締めた。

「反省したかい？」

「うん」

「なら、もうよかた。反省しとるもんば叱りつけるなど、誰にも許されんことやけんね」

小学六年生になった今知ったことで、この電話台と黒電話は亡くなった祖父との思い出だったそうだ。戦後、四号電話機として製品化されたその黒電話で、祖母と祖父は親の目を盗んで通話に勤しん

だらしい。

莉奈は、こつんと後頭部を電話台に寄りかける。やけに頬が火照るので、冷えた両手を当てて暖めた。それを見て、黒電話がせせら笑う。

——やっぱり君は意気地無しだ。そうやって悩んでばかり。

「うるさいなあ」

——思い切って告白しちゃいなつてば。

「まだ友達のままでいいもん。今が一番楽しいの」

——友達のままって、だってもうあと四ヶ月で終わりだろう。

「終わりじゃないもん。卒業するだけだよ」

——それはつまり、終わるということだよ。あの子、卒業したら北海道に引越すんだろ。

莉奈は頭を起こし、両膝で頬を挟んだ。手が裂けるように冷えるので、お尻の下に手を敷く。つんとした空気が耳を触る。今日も寒い夜だ。

恋というものがよく分からなかった。正確には今莉奈が抱えている心持ちが恋というのだろうけど、たとえこの気持ちを相手に伝えたからって、それからあの子とどう接すればいいのだろう。少女漫画をいくら読んでも、ロマンスもののドラマをいくら見ても、やはりそれはピンと来なかった。それなら、このまま友達のままだっていいじゃん、莉奈はそういう言い訳をいつも黒電話にするのだけど、黒電話はいつだって小馬鹿にしたように笑うのだ。

——君の婆ちゃんは、それはもうマセてたもんだ。中学生で深夜まで彼氏と電話なんて、当時じゃ考えらんないぜ。それに引きかえ、君ってやつは。

「あたしまだ小学生だし」

——四月には中学生だろ。

「そうだけど」

——あの子の電話番号なら知っている。通話なら俺がしっかり受け持ってやる。安心しろ。古くさい電話機だが、音の鮮明さなら現

代機にも負けないつもりだぜ。

莉奈は三十秒地面を眺めて、二十秒ぽかんと上を眺めて、それから十秒かけて自分の頬を叩いて気合いを入れた。

「決めた、今から告白する」

——その意気だ。がつんとかましたれ。

莉奈が意を決して立ち上がり、黒電話を睨んだ。黒電話も息を呑み、緊張を共有してくれる。受話器を取り、ダイヤルを何度か回したところで彼女の指が止まる。

「やっぱ無理っ」

頬を紅潮させて尻込みする莉奈に、黒電話は呆れたようなため息を吐いた。

「ごめんね、黒電話くん」

——まあ、いいよ。君に告白する勇気が出るまで、気長に待つてやるさ。

二ヶ月後、黒電話は喋らなくなった。

春の匂いのする玄関先で、それは唐突に訪れた。電話台がしくしくと泣き出し、莉奈はそれ以上にもっと泣いた。ほどなく祖母がやってきて、そっと後ろから莉奈を抱く。

「お別れせんとね、莉奈」

「やだ、あたし、どうしたらいいの、壊れちゃやだ」

祖母の皺だらけの腕に巻かれながら、黒電話をぎゅっと握った。

「最後に電話してあげたらよか」

祖母の声が震えていたので、莉奈は泣くのを止めて祖母を見上げた。彼女は口元をきゅっと上げ、細い目から涙を一筋流していた。受話器を上げ耳に当てると、キーンと張り詰めた音がノイズ混じりに耳を覆う。回転ダイヤルを回す指は、意外とすんなり動いてくれた。

雑音が消えた。それはとてつもなく小さな変化だったが、莉奈の頭の中では閃光が瞬くほどの衝撃だった。

「はい、荒川ですが」

あの子の声だった。

「あの、あたしだけど、莉奈」

呼吸が止まりそうになるのを抑え、喉を絞る。祖母の方を振り返ると、彼女は微笑みを返してくれた。

あとどれだけ話せるかも判らないけれど、これで伝えてしまいたい。黒電話が最後に頑張ってくれたなら、自分もその分しっかり伝えよう、莉奈はそう心を決める。

——これで、意気地無しも卒業するといいいんだけど。

莉奈は呼吸を整え、次の言葉を紡いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5302q/>

黒電話

2011年6月17日23時55分発行